

# 男女共同参画社会のための教育

河野 銀子

教育が個人の生き方に与える影響は大きい。大学の授業でジェンダーの視点を獲得し、社会に対して抱いていた違和感を整理して考えられるようになった経験が、今の私の大半を作っている。そんな自らを振り返りながら、学生たちに向き合う。目の前の学生の多くは卒業後に教員になるので、大学教員が彼／彼女らに与える影響はさらに次の世代にまで及ぶことになる。

多様な文化的背景の人々が共生する社会は、もはや理念ではなく、実態として進行している。そのような中で、学生たちに身につけてほしいのは、現実をきちんと知ることとそれを踏まえて教育のあり方を考える力である。その際、まずはジェンダーの視点をもつことが有効だ。そんな思いを共有する仲間と、『教育社会とジェンダー』（藤田由美子と共編著、学文社、2014）を執筆した。

一般に、学校教育は男女平等な場だと思われている。そう思っている学生も多いが、カリキュラムや教材、部活動や進路選択、そして教員の実態などの現実を知り、別の側面を見出していく。来日までスカートをはいたことがなかったのに制服だからとズボンでの登校は許されず、耐え難い思いで通学したという同級生の語りから、多様性の実際を感じ取り、教育現場はどうすればよいか議論を深める。

制度上の男女不平等がほぼ見られなくなり、家庭科の男女共修が始まった頃に生まれた今の学生たちにとって、仕事や教育の場での男女平等は教科書で習う知識でしかない。それゆえ、保守的に見える言動を取ることもあるが、新たな視点を得ることで考え始める。私たちも学生の現実をよく知り、伝え方を考える必要があるだろう。

教員志望の学生たちに伝える仕事は、男女共同参画社会の形成のみならず、それを持続させていく上で意義がある。教育の重要性を訴えるマララさんの演説に共鳴しながら、この仕事のやりがいと可能性を再認識している。

## PROFILE

かわのぎんこ：山形大学教授。1996年から大学教員（教育社会学・ジェンダー研究）。国会勤務時代に育児休業法制定にかかわる。大学の理事補佐として、男女共同参画を推進し、今年、キャンパス内保育所と学童保育をスタートさせた。著書に『高校の「女性」校長が少ないのはなぜか』（共編、学文社、2011）、『教員評価の社会学』（分担、岩波書店、2010）、論文に「女子高校生 の「文」「理」選択の実態と課題」（『科学技術社会論研究』第7号、2009）など。